GREETING

STORY

序幕(Vorspiel)

シルヴァリア国の王位継承者シャーンドル王子は、祖国の油田がアメリカの大富豪、シカゴのベンジャミン・ロイドに担保に取られたことで思っている。そこで彼は、少し気晴らししようと、お忍びでブダペストへ逃げ出す。彼はまた近々婚約の、モレニア国のローゼマリー姫と結婚することになっており、この晩もシャーンドル王子同様、貧しいのである。
[王子たちがやって来た]「グリル・アメリケーヌ」の客たちは、チャルダーシュや古き良きウィーンの楽曲より(王子には耐えられない)チャールストンやジャズを好んでおり、王子と駆け落ちの実現性も、演奏を許されているのはジャズだけ、という有様。
そこへメアリー・ロイド嬢が、父親の私設秘書ジョニー・ボンディと共に現れる。ボンディ自身も大富豪なのである。マリーは、「新しい婦人の愛でこクラブ」の一員としてヨーロッパを旅行中で、その目的はひとつの賭を行うこと だった。その賭とは、金で手に入れるのが最も難しいものを手に入れた人が、百万ドルを得る、というもので、メアリーは[シャーンドル王子のお伴が化けている]にせの王子とチャールストンを踊りたがる。
[にせの王子の]給仕に化けているシャーンドルは、その要望を王子の意向として断るが、ワルツなら喜んでお相手できるだろうと言い添える。続いて、金にものを言わせて、チャールストンだ、ワルツだ、と曲の取り合いが起き、シャーンドルが負ける。店の客たちはジャズをほめそやし、メアリーは老いうちに必ず王子とチャールストンを踊ってみせる、とシャーンドルに宣言する。

第1幕(Erster Act)

シャーンドル王子は自身の誕生日を祝い、おじであるパンクラツ王に代わって政務を引き継ぐ。王子は、メアリー・ロイドのシルヴァリアへの到着を知らされ、また彼女が、住民にチャールストンを流行らせようと企んでいるのを知り、だちにそれを全土で禁止させる。
ボンディは、メアリーが王の城を購入して、徹底的に改装するつもりであることを、シルヴァリアの大臣たちに伝える。メアリーは六百万ドル払う用意があり、大臣たちは承諾する。
モレニア国のローゼマリー姫(舌足らずな発言をする、一種の障害がある)が登場し、本人たちと関係なく、シャーンドル王子と姫との結婚話が大臣たちによって進められていることを知る。
シャーンドル王子は、メアリーが城をどうするつもりか知って、激怒する。メアリーは子供時代の人形をひきあいに出して、弁明する。(その人形は)すてきな制服を着ているが、中身はわらだけだ、と。
ボンディとローゼマリー姫は偶然出会い、姫は、発音障害のせいで金持ちからは相手にされず、貧しいシャーンドル王子と(王家間で決めた)結婚をしなければならない、と話す。ボンディは、自分も事情はまったく同様だ、自分たちが猛反対しようが、自分とメアリーの父親たちは自分たちをなにがなんでも結婚させるつもりだ、と嘆く。
シャーンドル王子は、メアリーが一緒しようとしている"古ぼけたガラクタ"が、自分は幼少期の思い出に満ちたいかに大事な場所であるかを、詳しく説明する。ついにはメアリーも、王子の正体を理解する。王子は城の売却に同意するが、その代金は国民の福祉のために用いられることになっている。
王子が(城での)最後の閣議式に臨む間に、メアリーは父親に「城を買った。そこに付属している王子も手に入れるつもり。」と電報を打つ。

第2幕(Zweiter Act)

買い取られた城は、莫大な費用をかけて最新の設備が施されたが、シャーンドル王子が気づいたように、その伝統的な良さは失われてしまった。王子は、相変わらずメアリーと踊るのを楽んでいたが、メアリーがワルツを踊っているので、嘆くしかない。メアリーも負けてはいない――なぜ、彼女のジャズ楽団員が毎日王子の元へ行くのか？王子は、チャールストンをマスターしなければならない、と打ち明ける。チャールストンを全土で禁止させたので、おおっぴらに、とは行かなかったのだ。
シルヴァリアの大臣たちは、王子とメアリーとの結婚に希望を抱く。パンクラツ王も同意し、メアリーをシカゴ公園に招待するのだった。こうするとメアリーは、その花婚候補たる王子と同等の身分となる。ボンディには、その得釣りをたたえて、ダビデの星勲章と世襲伯爵位が授与されることになる。あとは、メアリーの父ロイド氏の同意を得るだけとなる。
ロイド氏が、「若い婦人の愛でこクラブ」のメンバーと共に到着する。メアリーは父親に不明瞭な電報について説明するよう迫られる。メアリーは、自分が王子に恋していることを打ち明けたくないので、例の賭けのことを伝えるが、ロイド氏は事情を理解する。
ローゼマリー姫とボンディは再開し、ボンディは貧しい王子ではなく裕福な伯爵が求婚したら、と尋ねる。姫は、大感激して、この申し出を受け入れる。
ロイド氏はシャーンドル王子を迎入りに離婚しようとする。王子は、メアリーが自分に恋しているなどとは思ってもいないのである。はじめは王子のことを全くのイエスマンだと思っていたロイド氏も、やがて王子の性格の強さを悟る。
「愛でこクラブ」のメンバーは王子を品定めし、(例の賭けの)一等賞はメアリーのものだという決定に至る。王子は、大臣たちが自分をシカゴのロイド社に売るつもりでいることを知り、またメアリーの権謀を入手し、裏取引に策を立てる。
メアリーが、夜会に招待されたことが公表され、その一方王子はある声明を発表する――ローゼマリー姫との婚約である。これには、ボンディもメアリーもただただ驚くばかり。

終幕(Nachspiel)

「グリル・アメリケーヌ」で、パンクラツ王は、裕福なロイド氏の娘[メアリー]が自分たちの思惑通りにならなかったことでご機嫌斜めである。メアリーが見知らぬ紳士と店に現れると、王は自らメアリーに求婚しようと決心する。
シャーンドル王子もブダペストに来ており、ローゼマリー姫が裕福なアメリカ人青年[ボンディ]と駆け落ちしたことを知る。また王子はメアリーが外国人紳士と店内にいることに気づき、その紳士が無遠慮に自分を見つめているので、その無作法な態度の訳をまこうと、自分のテーブルに呼んで来させる。
その外国人紳士は、王子にメアリーへの愛の告白をさせようと、わざと不在法にふるまっていたのだった(メアリーはもとより王子に夢中なのだ)。
その紳士は、パラマウント・フォックス映画会社の社長で、この会社は、実話の方がシナリオ作家が考えていたものより、すっといい映画になると気づいていたのだった。
メアリーのシカゴ公園への招待が、最新作の結末を提供しており、そこでは実際と異なり、ローゼマリーとの婚約はうまく解決されて、ハッピー・エンドで終わるようになっており、これこそアメリカの観客が求めるものなのである。
メアリーは、初めて会った時から王子を愛していたと告白し、今やふたりがチャールストンを踊る時がやって来た。王子は、チャールストンはもう流行おくれだが、スローフォックスなら喜んでお相手しましょう、と言うのだった。

CAST

日本を代表するオペレッタ・アーティストが勢ぞろい!

シルヴァリア国王（シャーンドル・ボリス王子の父）
指揮・音楽監督 大浦 智弘　演出 今井 伸昭

シャーンドル・ボリス（シルヴァリア王子）
斎藤 忠生　西 義一

ローゼマリー（モレニアの王女）
高富 仲吾　倉石 真

メアリー・ロイド
栗林 琰利子　今野 給理香

ボンディ（ロイド氏の秘書）
佐藤 智恵　森 裕美子

ベローリン侯爵（シルヴァリアの国務大臣）
吉田 敦　大石 洋史

ポヤジョヴィッチ伯爵（シルヴァリアの財務大臣）
浅山 裕志　大石 将史

ティハーニ／謎の紳士（ブリル・アメリケーヌ支配人／謎）
品田 広希　志摩 大喜

ジプシーの楽士長
野口 大輔　中村 憲司

ベンジャミン・ロイド（メアリーの父、シカゴの大富豪）
Yui　堂野 沙織

メアリーの母
藤川 鉄馬　山下 直

ネグレスコ伯爵
ゲスト あべ静江（第1幕）　如月 愛梨（第2幕）　石福 敏伸

アスター 関根 かおる
カーネギー 織田 彩里子
フォード 神谷 優香
ロックフェラー 西 結愛
ヴァンダービルト Yurino
売り子・スティール 小酒 瑛子
労働者 吉岡 努
ダンサー 宇田川 路代
ダンサー 田中 麻衣子

■バンド
トランペット 林 沙希
コントラバス 菊井 優香
ドラム 古島 智仁

■アンサンブルオーケストラ
ヴァイオリン 小山 恩久
ピアノ 村田 千晶
エレクトーン 福澤 香

■ステージング
ヨシ矢野

■合唱・ダンサー／Musica Celeste 合唱団・テアトルアカデミー　※諸事情、キャスト情報は変更する可能性もございます。予めご了承ください。

STAFF

■プロデューサー：佐藤智恵
■舞台監督：植田ヒロシ　■照明：鵜野眞也（（有）アイズ）　■編曲：大野恭史　■音響：五十嵐優（Sound Scape）
■振付：宇田川路代　■ステージング：ヨシ矢野　■衣装：栗月遠花　■訳詞・台本：吉井淳
■広報デザイン：マーブルデザイン　■表紙撮影・舞台撮影：長澤直子　■配券管理：合同会社アンデム
■稽古ピアニスト：富永有里乃、横口めぐみ　■制作：株式会社ムジカ・チェレステ